

集落協定 かわら版 (第37号)

(平成24年7月4日 山口県農業経営課)

第1期対策からの継続協定をご紹介します。

	伊佐地集落協定
面積	12.5ha 田の急傾斜地のみ
参加者	農業者 12人 非農家 2人
交付金	2,634千円 共同取組活動 52.4%



「山口県中山間地域等直接支払制度検討会」(県の第三者委員会)の委員である山口大学農学部の糸原義人教授が、宇部市の伊佐地集落協定を取材しました。

綺麗な集落環境には 協力・まとまりの歴史あり

・・・宇部市東吉部・伊佐地
(いさじ)集落協定・・・

田植えも一段落した6月、今回は宇部市東吉部(旧楠町)の伊佐地集落協定にお邪魔しました。協定代表の中村さん(83歳)、協定役員の松田さん(62歳)、井上さん(72歳)、多谷(たがや)さん(72歳)の4名の方にお話を聞きました。

集落協定が第1期対策から12年続いています、その要因は？

第1期対策時に、集落協定の共同取

組活動分で農道を舗装したことがとても大きいです。舗装ができるまでは、道路の凸凹を解消するために、バラスを何度もまくのが本当に大変でした。初代の協定代表者は見る目が違う(先見の明があった)と思います。

当集落協定は農家12戸、非農家2戸で構成されています。集落活動(=協定活動)には非農家も参加しています。年4回の全員集会や共同取組活動後の懇親会で交流を深めてきました(笑)。

当集落には、非農家を含めた集落のまとまりがあるので、これまで集落協定が続いてきたのだと思います。



< 構造改善センターからの風景 >

この集落で農業生産活動が持続している要因は？

農道の舗装効果が大きいのですが、併せて、田への進入路がしっかりしていて、田の中まで車を乗り入れることができるのも大きな要因です。

また、減反があった時代でも、表作では加工用米作りを推進して、田を田として維持するよう呼びかけました。田を1年間でも作らないと、水田機能が低下して、水稻を作り続け難くなりますからね。



<取材の様子>

直支集落協定取組までの活動状況は？

昭和60年代に、旧楠町域で最初の基盤整備(ほ場整備)をしています。基盤整備した当時は、機械利用組合を作り、ブロックローテーションを組んで裏作に麦を作ったりとか色々やりました(笑)。

直支集落協定に取り組む前から、集落の皆の協力があって、まとまって活動してきました。集落のこのような歴史があるので、今日の集落(協定活動)があると思います。

直支交付金の使い方の特徴は？

第1期対策から共同利用機械として、田植機を導入しています。ちょうど今年更新し、通算で直支制度導入3台目になりました。昔は勤め人が多かったので田植機利用が週末に集中していましたが、今は(勤め人が減ったので)いつでも利用できるようになりました(笑)。1回当たり、原則半日の使用が決まっています。直支交付金は役立っています。協定参加者の皆で大事に使っています。



<川周りの管理の様子>

その他の協定活動は？

農道や水路・川の維持管理が主な作業です。水路・川周辺の草刈り等はいつもしています。水路・川の上には雑草のトンネルはありません。お陰様で水路をきれいに管理し始めてから、ホタルが年々多く出るようになっていきました。

平成21年の豪雨災害では、水路が壊れましたが、すぐに皆総出で泥上げし

修理することができました。これも中山間直支に取り組んでいるお陰です。



<ホタルが出る付近の様子>

第4期対策があるとしたら？

これからの集落・農業はこのままじわーっと自然に先細りしていくのかもしれない。

第3期対策の終了時期となる3年先もわかりません。万年青年ですが(笑)、第4期対策があるとして、自分達は手がたう(手が届く)だろうか、農業が続けられるのだろうかとも思います。しかし、ひっくり返らんと農業はやめられん(倒れるまでは農業をやめられない)です。第4期対策があるならやりたいと思います。

若い方への期待は？

集落の若い人は勤め人ばかりで、農業に熱を入れてくれません。我々(親)も、「農業は儲からん」とこれまで言ってきたので、若い人は農業はやらない、やっても手を抜こうという考えになりますね。

今は十分な段取り(準備)をしておいて、機械に乗ってやる作業を若い人にやらせるようにはしています。農業をやるように勧めてはいますが、集落外へ他出した子供達には、そこでの生活があるので、帰ってこいと強うも言えません。

しかし、親に負担がかかるのが心配なのではないでしょうか、最近は週末に手伝いがてら、草刈りしに若い人が帰ってきたご家庭もありますね。

このような若い方でも農業は出来ますよね？

農業のスケジュール、例えばこの時期には何をするとかを知っていて、後は農業へのやる気が十分にあるかどうかの問題になりますね。まあ非農家出身の私でも、退職後は農業をやってきたんだから、他の皆も普通に農業をやりよるん(やっているの)だから、これまで農業をしてこなかった若い人でもできるいや~と思います(笑)。

直支制度がなかったら？

ほ場整備された条件の良い農地でも荒れた(管理されない)田が出ていたことでしょう。また、こんなにも集落環境がきれいになっていないだろうとも思います。

直支制度のお陰で、集落の皆の協力しようとする気持ちはずっと継続してきています。今は、恥ずかしくないとも感じのいい集落になっています。



後列左から中村代表、松田さん、前列左から井上さん、糸原委員、多谷さん

～取材を終えて～

山口大学農学部 糸原義人

宇部市の伊佐地集落を尋ねたのですが、あいにくの雨でした。しかし、地区の集会所から眺める眼前の風景は雑草がよく刈り込まれており、緑のジウタンよろしく、私の幼い頃の懐かしい風景そのものでした。

伊佐地では現在、水稻エコ 50 や各種野菜が作られ JA、直売所に出荷されています。集落協定は平成 12 年、第 1 期から続いており、水田 12.5ha を対象として「中山間直支」が利用され、農道や水路、農地の管理、下草刈り、河川清掃等が農家 12 戸、非農家 2 戸の協力によって行われています。

ここに来て思ったのは、皆さんの協力姿勢がとてもすばらしく、その協力姿勢があればこそ、集落が守られているということの実感でした。そして、こうした協力の潤滑油とし

て「中山間直支」があり、「中山間直支」の重要性を改めて実感することができました。

「荒神祭り」や「災害の協同復旧活動」等で培われた協同という強い絆で結ばれた「集落」の上に様々なコミュニティが作られ、「ホタル祭り」や「そうめん流し」、また周辺の団地の子供達への「農業体験」と、その活動は地域の暮らし、文化、教育に、とても大きな影響を与えています。

これからも、強い絆で集落が堅持され、皆様が先祖から受け継がれてきた農地や村の文化の維持、発展に活躍されることを祈念する次第です。

ただ、これからは地域を担う若者をどうするかが大きな問題です。伊佐地に魅力を感じて移住される方、町からの通い農家、また非農家を含めて、皆さんで英知を結集されて地域の存続・発展が適うことを心から願ってやみません。

★★★★★編集後記★★★★★

協定の皆さんのお話しから、集落のまとまり・協力しようとする気持ちが大切だと改めて感じました。

取材では大変お世話になり、どうもありがとうございました。

山口県農業経営課 中野・石川

電話：083-933-3350

★★★★★★★★★★★★★★★★★★